

資料紹介

ア・テンポ

発行所 「ア・テンポの会」

『ア・テンポ』の会の山本真弓さんによれば「震災直後から、皆、被災した中必死の思いで光明を見つけようとして書き綴った詩」が載っていて、その後ずっと書き続け、発行されているそうです。

(一面の 再びの春 は、今年のフェニックスコンサート)の歌詞になっています。



第12号の資料室だより4面で紹介いたしました松村好さんから、スエーデン人のパソク駐在ジャーナリストBERTEL LINTNER氏が長田区駒ヶ林町・西代通の仮設などを訪れて撮った写真等が載った記事をいただきました。

阪神・淡路大震災の

復旧・復興記録

復興・学校法人

神戸村野工業高等学校

生徒の手記や、震災直後の写真、校舎の解体・新築工事の写真、村野工業高校に於いての危機管理に向けての取り組み等が掲載されています。

灯台 1998年 新年号

発行者 大阪市職員労働組合

港区役所支部

井部 洋一

全二六ページのうちP13～P19まで七ページにわたって、長田区での震災についての記事が載っています。内容は、長田の街を見ての感想文等。

新しいおめでどうございます。
懐かしい故郷へ帰って来ような。
そんな長田の町に、日も早く帰
来ることができることを、祖先の魂と
共に祈ります。
山田洋次

人・街・ながた

震災資料室だより

人・街・ながた

震災資料室

発行

〒653 神戸市長田区北町3-4-3

電話(078)579-2311

発行人/寿 広文

編集人/武川・福谷

第13号

もくじ

1. 詩/再びの春
32. パソコン紹介
4. 資料紹介

再びの春

山本真弓

春に芽吹く やわらかいいきもの
金色の生毛の中で かすかな吐息

五弁の花びらの中で
春の光をつかみとるおしべ
ヒマラヤ杉やヒバの萌黄色
バラの朱いとき

たどっていても 薄れかけた記憶は
春風に消されていく 梢に鳥の影

六甲に流れる谷川にも
もうモリアオガエルの姿はないと
彼は呟いていたのだった
グラウンドに弾む声

あの日何が起こったのか
何が喪われたのか
光の届かない本棚の静けさ
記録は再び語るだろうか

詩集「ア・テンポ」から



大道通3丁目 梶田理容店に2

さあ再出発!

震災資料室のパソコンで 何をしているの？

「人・街・ながた震災資料室」には、パソコンやスキャナー（写真等の読取機）を置いています。今までも展示会で実演等を行なってきましたが、今回はその概要を簡単に紹介します。

□長田区ホームページ

まちづくり推進課では、震災から一年目の平成八年一月十七日、神戸市九区の中で最初に区役所独自のホームページを立ち上げました。

これは、単に長田区の広報というだけでなく、震災直後から心温まるご支援をいただいた全国・全世界の皆さんに、「ながたの街」の復興状況を発信していこうという趣旨でインターネットを活用することにしたものです。

実際に作業に取りかかったのは平成七年十二月に入ってからでした。当時は、ウインドウズが始め、ようやくインターネットという言葉も世間に認知されようとしていた頃であり、課員誰もがホームページを見たこともないうえ、一月十七日まで時間もなく大変でした。それでもボランティアの皆さまのお蔭で何とか自前でつくることができました。

内容は、長田区の概要、歴史、被災状況、「広報ながた」の抜粋、復興する長田

の様子、著名人によるボイスメッセージと励ましの年賀状、ボランティアセンター・長田消防署のコーナーまであり、行政機関のホームページとしてはかなりの分量になりました。現在、世界に発信中の長田区ホームページが、震災資料室のパソコンで見ることが出来ます。家庭や職場でご覧になりたい方は次のアドレスです。

www.city.kobe.jp/kobe-city/
cityoffice/42/nagata/INDEX.HTM
(Email: nagata@ward.or.jp)

□地理情報システム(DIMS-S)の導入

震災後、まちづくり推進課が担当した復旧業務に危険家屋の解体撤去がありました。一月二十九日に受付を開始して、当初の五日間で四千件以上の申込があり、大混乱の中で、家屋の場所を特定して、書類を整え、業者に発注する作業は大変でした。色を塗ったり、番号を書き込んだりして、使用した市販の住宅地図は何十冊にもなりました。

そんな時、京都大学防災研究所の亀田教授と角本客員教授（当時）から提案されたのが、後で様々な業務に展開していたDIMS-S（ディムシス：災害管理空間情報システム）でした。

に展開することができるようになり、業務は飛躍的に効率化されました。

当時は、行政の実務に地理情報システム（GIS）が使われた例は非常に珍しく（今も状況は変わっていないらしい）、いろんな方面から注目されました。ただ、使う方の職員はパソコンなど触ったことのない者ばかりで、マウスの操作に慣れるのも大変でしたが、五月頃になると、これがなければ仕事にならず、いつの間にか課員全員で使いこなしていました。

□防災訓練での活用

平成八年六月の「長田区総合防災訓練」でもDIMS-Sを活用しようということになります。刻一刻と入ってくる災害現場の情報をパソコン上の図面にビジュアルに再現して、家屋や道路など、あらかじめ張り付けられた平常時の現場写真や映像を参照しながら、災害対策本部における初期の指揮命令を支援するシステムです。

区内の水防危険地域のなかで安全が確認されたのはどの区域か、危険とされる地域に土木、消防、警察などの職員がどのように配置されているか、避難所までの経路はどれか安全か、避難する必要のある住民は誰でも人かなど、現場からの情報を画面に展開していきます。そして、この避難住民情報は、ノートパソコンを

持ち込んだ避難所で、そのまま安否確認に使用され、携帯電話を使って即時に本部に送信されてきます。

平成九年の防災訓練では、このシステムをさらに拡充し、災害現場の写真をノートパソコン、デジタルカメラ、携帯電話を使って本部に送信しました。単に写真を送るだけなら、現在市販されているモバイル機器でも対応できますが、どの場所をどの方向から撮った写真かということが分からないのです。DIMS-Sにより場所が特定された画像を、平常時に私たちが使っている機器で送受信することに大きな意味があったと思います。

また、阪神大震災で実際に経験したことですが、災害時には電気も電話回線も役に立たない場合があります。パソコンネットワークといったものが有効に機能するとは限らないのです。DIMS-Sの基本理念は、あくまでパソコン単体で、しかもノート型のように充電可能な機器や携帯電話で十分に機能することにあります。ノートとカメラを持って現場や避難所へ走り、写真や安否確認などの情報の入ったフロッピー一枚を持って帰ってくる、そんなことも想定しておく必要があるのです。広報媒体にしてもそうですが、とにかくいろんな手段を平常時から確保しておくことが重要です。「人間の想像の域を越えた状況下に置かれる」

これは、三次元で表現される立体空間と時間軸を加えた四次元で情報を管理するシステムですが、ここでは、パソコン上の地図に文字情報や画像を貼り付けて、検索、照会、更新などの業務を一元的に処理することで、事務の効率化、正確化、迅速化を図りました。

それまでは、市民から「解体を申し込んだが、いつ撤去してくれるのですか。」という問い合わせに、「事務手続きが今どこまで進んでいるのかを調べるのに二十分はかかりますが、よろしいですか。」という返事をせざるを得ませんでした。

申請書類が受付、場所確認、電話による本人確認、発注など、各段階ごとに整理され（要するに書類が事務所内を動きまわっている）、図面も格段階ごとに作成していますから、業務の進行を一元的に管理することができていなかったのです。DIMS-Sの導入で、少なくとも前日までの最新の情報が、住所を聞くだけで即時に参照できるようになりました。

また、このところが重要なのですが、解体業務を進めていく上では、単に名前、住所といった住民情報だけでなく、一戸建か長屋か、隣家は申請したか、重機の入道はあるのか、といった地理的な情報が不可欠でした。図面上のそれぞれの家屋に進捗状況を示すマーク（★は受付、■は取下げ、▼は保留、▲は発注済など）と受付番号を表示し、そこから台帳情報

それが非常時なのです。

□震災の記録・資料の整理

平成九年一月十七日「震災資料室」が長田区役所に開設されることになり、DIMS-Sを使い、被害状況等の整理作業も行ないました。り災状況、家屋解体状況、危険家屋の写真、道路交通不能箇所、避難所と避難住民との場所的關係など、それまでに保存していた震災記録をデジタル化し、図面に落とし込んだものとして出力し、パネルで展示しています。

以上が、「震災資料室」のパソコンで見れる主な内容です。

なお、現在資料室に保管されている避難所日誌、張り紙、新聞、写真などほとんどが紙情報ですが、これからも息の長い活動をしていくためには、貴重な資料はできるだけスキャナーなどでデジタル化し、閲覧はパソコンで行い、原本は別途保存するという方法を今後は検討していく必要があると思います。

最後に、京大防災研の角本さん、東工大博士課程の畑山さんをはじめ、ホームページ、防災訓練、震災記録等の作業に徹夜も惜しまずご支援いただいたボランティアの皆さんに心からお礼申し上げます。